くれは
八嶋
あふむ小町
はうかぞう
東岸居士

十二

呉服

次第 道のみちたる時ぞとてや國
ゆたか成覧 抑是は當今に
仕へ奉る臣下也我此間は攝
州住よしに参籠申て候又是
より浦伝ひし西の宮に参らばや
と存候 住江や長閑き浪のあさか

かゝる玉藻かるあま人の道
も直なる難波がたゆくゑの浦も名
にしおひたる呉羽の里に着きにけり
一セイ
呉服とりあやの宮の浦里に年
経てもまたや海士乙女立よる浪も
あつまりつゝもたゞよひ音たてゝし
シテサシ
昔帝の國にしれぬ乃里にすみなひ

さしき二人の者我此国にありながら
我は唐のみかとに召されし女工の者と思ひ出る
月の都や西の海波路遥遠にうつしか
たゝ我は唐人代年を経て家に呉服
の里迄も我まちまれる所なれ
今もめてきし代の為をとりもちて
しきる紗の宿まとふも織唐まぬ

れ急がはしくど数鳴の音通ひきそて
詞の葉草の花迄もあらはしきぬの
色えて心をくだくもろはきの袖
もたへなるかたちかれく　掛も
我此松原に来て見れば。やさしき女
性二人あり。一人は呉機をとり今一
人は糸をとりひき手に常の里人と

はみえ給はず。も方々いかなる人ぞ
和　耻かしや里なれ馴るる松陰のつゆほ
そき身の夕月の影にまぎれて浦
浪の声によそへて。たゞおのが音やそ
しとおもひしにきかれぬるや恥かし
や　行とうつる綾甚らずは常の
里人あらで此松陰にかくれゐてたゞ

織絲は不審ありげなる様なる言葉かな
へし　これは應神天皇乃御宇に
めてしさき御衣を織そめし呉服とう
あやはとりと申し二人の者ぞとよ
めてたき御代にあらはれ現にあらはれ来り
なり　かしきの中をもとおさめられ
ずれは昔乃君乃代ゞに唐國よりも渡
されしあやはとり二人の人あらうじて現
在に形まき給ふ奇特といひたゞ不思議
あやくも昔も給ふあらずそこの宝を
呉羽乃ちとくがお付そめしも有故ぞ
我此所に有しゆへあり　まづあ
やはとりとなさはたの糸をとりひく
たくえゆへあやれ紋をもあはのおもぬにあや

はとりとハやあり　呉服とりとハなる
おの糸ひくまをハくれはとりといへハ呉羽
なるてようつくくれはとりとハ
やせ　はきハみつれゑよよきそ
くれはとり　あやとハや待へくう
二人　絲きハ我らハ唐人あれハやまと詞ハ
さらねた　くれはとりあやとまく

みしかとも二村山とよみ寺もかき
まもと思ふにあり　呉羽とりあやし
めならす振人乃つく御国の猶ハさひろ
きみよろしき我人の思ひハ唐人と
我らもと出所をきらハれハ只かハらや
クリ地　よさハ君み仕ふる人の絲やく
翁　丈綾といハハ唐呉郡乃地よりも織

うめて世乃おさまりしとなつきあり
其のちに神功皇后三韓をせめ給へ
ひしより和国異朝の道ひろくなりて
の国迄なびく世乃我日の本ハ長閑
なる御代の光ハあまねくて国ゆたかに
たみゆたかなり　東南雲治りて
西北の風静かなり　応神天皇の御宇

かとよ呉国の勅使此国に初てまゐりて
ひしよりあやはくれは乃女婦をそへて萬
里の滄波をしのぎて西日数経り
あく呉羽乃里にやすらひまし日にあ
つるそれおのづからきせを織くれ綾のは
哀せとなめらる勅使参内ありしかハ叡感
ことにかわりしかバ高麗よりもよく付つ

袞龍の御衣乃紋にとあるこもれうまさ
山だしと色をうつし氣象なるなり
雲鳥のかざをたゝみあやとあれ
いともかしこききみ　總じて萬
代は絶えぬ御調あるべしと法定め
昔より呉服乃文字をやかきて
それはとりあやはとりとげ付はき綾

は年もとしつく色をとらひあやの錦
乃唐衣をひくも君の袖ふるさた
めしをひく恵乃かげは代ゝめてたき

上哥

ちまきよつきても此君乃しめて
たきめしみ明乃よしうちむく試
織りかへいさくはちかたおの錦を
まりて我君の御調よ備へやはん

地上「きりやはたおる錦の色々に
小車のうしみつの時すぎあへず
きぬの色を待侘ぬ涙をもくまなく
げにやとひて墨染よりはあやもなりぬ
又鳴鶏をまちかねてやいかなる
待侘ぬ夜はかくとてもまたたまへ
上歌「うれしきやいざゆきて見松

陰に招き居ても月も嘯くらうの時
非の声とも待ちえん
代々あまりの羽衣まれなりともあつせ
いさぬ山ほとなん世にやちよと
松の葉のちりうせずして色はまさ
待ちわびるきよのためしかな
やけ鏡の彼方かけりぐる時とかや

上地「浜辺乃かきよせて夕浪よ声た
くそつるだゞる乃音 シテ「錦を織るお
とはらはらうの字をあらはし衣
つ襪のうへよ恋ふる乃 シテ「拝松の風
きいろうつ浪の音 地「志きりよひ海
おきなれもの「とるや呉羽乃手く
里乃いと 地「秋とるはあやも シテ「みつ来

乃あしたを 地「きりはたりちやう
シテ「きりはたりちやう/\と 地「悪魔
もはらふ声あまや、きよくもりひ
めの袖乃うて 上「思ひ出づらう
織女乃くだまくあく家掛れ人の
夢乃精霊妙童菩薩も影向あ
里あるあをもすゞよ面くたてう

乃あやもと織たくく我君よりかきを
もつみよ乃事あし乃二人の織姫
呉羽あやはのとりくよくれもあや
もの(か)やうりく乃かろうきおもふる
御代とうやめてたきれ

八 鴻

月も南乃海辺やつくハ鴻乃浦
跡尋ね見もハ都方より出る
僧よるくはば我未四国をとひ往よ
此度思ひ立西国行脚と心ざしは
雲霞うきい立浪乃わきろ舟く
けり日の雲も影うひて其方の空

とも行旅ハつらく明石舟路経て八嶋
の浦よ着きよけり浦よ着きよけり急候程よ是ハはや
讃岐乃国八嶋の浦よ着て候日乃
暮て候へハ是成塩屋よ立寄一夜を
明さハやと思候 面白や月海
上よ浮ミてハ波濤夜火よ似たり
漁翁よる西岩よそふて宿すあかつき
湘水を汲く楚竹をたくも今よ
志られて芦火の陰ほのみしらむる
おもしろや 月の出塩乃おきつ波
霞のをふねこぎつれて あまの呼
声里ちかく 一葉萬里乃舟の
道たゞ一帆の風よ任せ 夕への空乃
雲の浪月の行衛よ立消て霞よう

み松原の陰ハ緑にうつろひて海岸
さとも知らぬ火の光 墨の海にやゆく
たる 家々ハ鳴の浦つたひ海士の
家居も程よ 釣の小舟もなきこれ
うらくに霞わたりて沖ゆくやあまの
小舟のほのくとみえて残る雲浦
風音も長閑成けるや心を残すらん

シテ詞 先塩屋に帰りやすまふるらう
ワキ詞 塩屋の主の帰りて候 立越宿をかり
ばやと思ひ候 いかに此塩屋の内へ案内
申候 ツレ詞 誰にて渡り候ぞ ワキ 諸国
一見の僧にて候 一夜の宿を御かし候へ
セ 暫く御待候へ主に其由申候はん
いかに申候 諸国一見の僧の一夜の御宿と御座

シテ「見苦しき塩屋のはにふなれども便りに見苦しは
猶お宿は叶ふまじき由申し候へ　ツレ「畏て候。御宿
の事を申して候へば余りに見苦しく候ほどに
猶お宿は叶ふまじき由仰せ候　ワキ「いや苦しく
見苦しきは苦しからず候我らは都
方の者なるが此浦始めて一見の事
なるが日の暮れて候へば平に一夜と仰せて

御申し候へ　ツレ「心得申し候由申して候へは
旅人は都の人にて御入り候が日の暮れて候へば
平に一夜と仰せ候　シテ「何旅人は
都の人と申すか　ツレ「さん候　シテ「実に痛はしき
御事かな　さらば御宿を貸し申さん　ワキ「[illegible]　大事来り
ところも芦の屋の　シテ「塩焼く煙と云ふを
地上「さつもしき月は照らせども　シテ上「曇も黒ぬ

春の夜の 二人 朧月によしあしもなき
蜑乃屋は鳴よたてる高松の
苔の筵は痛はしや和歌にいはく
浦の名のもしほかるたづきも絶ぬ
きのふと過ぎ今日と暮れ雲井よ遠き旅衣
故郷も都とやあまりや捨つるも
本はとくやりて浪よ迷ひきりく

ワキ詞 いかよしば行くや誘似合あるあ早々
ておほいまの人源平の合戦
のちまぎと承り候へば通夜語つて給
ゆ雰はへ シテ詞 安き間の事語つて
聞せ申へしいで其比は元暦元年
三月十八日の事なりしに平家は海の
表て一町計に舟を浮へ源氏は此汀に

うち出給ふ大將軍乃出立にハ赤
地の錦のひたゝれに紫すそごの御
着背鎧かんかりくらかけようけゐ
すり一院の御使源氏の大將撿非違
使五位の尉源の義經と名乗給ひし
はこつりらあ門れハ大將也とみし今
のやうよぎみ出られてハ　其時平家の

方よりも言葉戦ひこと終ば兵船一艘
漕よせて浪うちきハよわりあつて
陸乃かたきをを待御しよ　源氏の方
乃もつをを兵五十騎計中にももさとの
やれ四郎ともを乗で出ちかまてみえ
し處よ　平家の方よも悪七兵衛
景清とちん乗てたのやさとめかき馳ひ

しよ かのみほのやハ其時に太刀打
折つて力なくしてすこし汀に引退しに
景清追つ懸けみほのやが着たる兜の
錣をつかんでうしろへ引けば
みほのやも身をのがれんと前へひく
たがひにゑいやとひく力に鉢附
の板より引ちぎつて左右へくわつ
とぞのきにける是を御覧じて判官
御馬を汀にうち寄せ給へば佐藤次信
能登殿の矢先にかゝつて馬よりしもに
どうと落れば船には菊王もうたれ
ければ共にあはれとおぼしけるか船ハ
沖へ陸ハ陣に相引にひく塩の
跡ハ鬨の声たえて磯の浪松風計

上ロンギ 地 松音ならひしくうかよきゝみつさは
なりとよ海人の網曳き語
りし老のゆくへや シテ上 我名を何と
いさ浪のひくや志賀も朝倉や木の
丸殿よりあはれ名乗りしても
下 ゆふ庵 上地 宮も藁屋もはかなき其
名乗りし老の シテ 音を語る小忌

衣 地 着つゝも今宵 雲乃衣の
上 湖乃落葉暁おろしの時よ成へ
しまし時ハ我名やなのらん懺悔のうへ
名のるまじつれ乃浮世の夢う
はまし給ふなよ かしこきやしれ
老人の身なれど寿 筆にも義経の
世乃憂心ざ庵ゆくまでとゆめしつる

上哥
猶も又行かうたのつく松かね枕して
もむすぶ思ひのなる苔むしろ重て
夢を待居たりく
落花枝にかへらず
破鏡ふたゝび照さず然共猶
妄執の瞋恚とて鬼神魂魄の境界
にかへり我と此身を苦しめて修羅
のちまたによりくる波のあさからさりし

業因かな
かゝりやあら早暁にも成や
夢と思ひし寝覚の枕より甲冑を帯
しみし絵は絵に判官なくましまする
我義経の幽霊なるが瞋恚にひかるゝ
妄執にひかれ猶西海の浪にたゞよひ生死
の海に沈淪せり
愚やな心から
生死の海とも三界苦海の月乃

シテ「雲の夜あれと曇なき心もともなる
今宵の空「昔も今に思ひ出ける
シテ「舟と陸との合戦の道「所からとて
シテ「忘れえぬ　武士の八嶋に入るや月
弓のうく本の末あらまし家よ弓
箭の道ハ迷ぬに迷ひけるぞや生
死の海山をはなれやらで帰る八嶋の
恨めしやとにかくに執心の残りの海の
深き夜に夢物語申すなり
クリ地「忘れぬ物を閻浮の故郷に
去って久しき年なみのよるの浮めぢに通
ひきて修羅道のちまたとなれり
サシシテ「思ひぞ出る昔の春月も今宵に冴えかへりし
元の渚ハ爰なれや源平たがひ

互ひに矢先を揃へ舟を組駒をならへて
打入／＼足なみに鐙をひたし
て責戦ふ　シテ詞　其時何とかしたり
けん判官弓を取落し浪にゆられ
て流しに　地上　其折しも引塩にて
遥に遠く流れ行を　シテ詞　敵に弓を
取られじと駒を浪間におよかせて敵
舟ちかくなりし程に　地上　敵ハ是をみし
よりも舟をよせ熊手にかけて既にあや
うく見え給ひしに　シテ詞　されとも熊手
を切払ひ終に弓を取返し本の渚に
打あがれハ　上地　其時兼房申やう口惜
の御振舞やな渡辺にて景時が申
しも是にて候へたとひ千金をのへ

たとひ千金を延べたる御弓なりとも御命にはかへ給ふべきかと
涙を流し申しければ判官聞召し
いやとよ弓を惜しむにあらず
クセ
義経源平に弓箭をとつてわたくしなし
中
然れども佳名はいまだなかばならず
されば此弓を敵にとられよしつねは小兵
といはれんは無念の次第なるべし
よしそれ故に討たれんは力なし義経が
運の極めと思ふべしさらずは敵に渡
さじとて浪にひかるゝ弓取の名は末代
にあらずやと語り給へば兼房さて其
外の人までも皆感涙をながしけり
上 シテ
智者はまどはず勇者は懼れずのやた
け心の梓弓敵には取り伝へじと惜む

ハ名のためにおしまぬハ一命なれハ身を
捨てこそ後記にも佳名をとゞむべ
き弓筆の跡なるべけれ　又修羅
道のときの聲　矢さけびの音
しんどうせし　けふの修羅の敵ハ
たそ　なに能登守教經とや　あら物々し
や手なみハ知りぬ思ひぞ出るだん
の浦の　其舟軍今ははやく
閻浮にかへる生死の海山一同に
震動して舟よりは鬨の聲　陸にハ
波のたて　月に白むハ劔の
光り　うしほにうつるハかぶとの
星の影　水や空　空ゆくもまた
雲のなミのうちあひさしちがふる

将軍のかきひきいちえんもせきし
狂よ雲の波より明てかうさを
みるゝハむき居るかをしめどきさの音しと
聞えしハ浦風あらきり高まつの
浦かきあらそり浪松のあさ風
とゝりなりよるれ

鸚鵡小町

平ウ
是ハ陽成院に仕へ奉れる新大納言
行家なるがいつも和哥敷嶋の道に
御心をかけられ暮に一首を撰
きれハたゞ叡慮にかなふ一首なし
爰に出羽国小野良実か娘に小野
小町がとはあらひなきさ一首の上手

みそけかどとハ百年の姥と成て関寺
辺にありと聞召及ばれ帝よりあはれ
憐乃御歌をくだされ候其返歌
よりかさねて題をも下さるべき宣
旨にて候程に関寺辺小野小町が方
へと急候
セイシテ かきてとも我ハ誰とも
松坂や四の宮河原よつれさびれまで

サシ 昔ハ芙蓉乃
花たりし身なれども今ハ藜蓼の草
とある藪もせハきうすいとおとろへ
へ凍梨のあらぬとし杖つきあり
てハ力もなく人を恨身をかこちお
ひつる門やもをかねて趣程と人
上哥 きつよはちりらそでハ捨ぬ命のうきよそ

ひさしく面影よつくもかみかくるさ
里をハかくらしと音をてわれ君かね
の夢ハ寝覚のおつさいよをあさきし
そふりおる秋心く　地「世の中よ是成
ハ小町にてあるか　シテ詞「見ちかれし雲の
上人あさましましのごとくちと承り
いかや何るなとれ　地「さて此程ハ

いつくを栖と定めさるう　シテ「たまたまも
もろとハあかれともいはゝ関寺鳴よ日
数をおくりに　地「さて関寺へさぶらふに
都をかりそて閑居にハ面白き所なり
シテ「前にハ牛馬の通路ありて貴もゆき
賤しきも通る　地「後にハ霊鷲の山
たかうして　シテ「志かも道もあく　地「雲の

シテ
春のすゑ　立つゞくれまきしろやま
色つく梢にかゝる白雲は花かと
みえて散しろや松風も匂ひぬれば
花ちりくだれと計によそふ雲の香
面白きをしさられば湖の
志賀からさきのひとつ松はなのよそひ
あふさかや東に向へば都や名やまの

観世音をいのればなる橋は狂人のあゆみき
あふさかの関のかくれためしなすべし
シテ下歌
かくて都を立し時は迷の露よ
きりとうもくべき教をもおきされば絵より
なかれ枝にすがり都路に出るをぞ
こふさえぬ時は涙の関寺に帰るをは
地
めやすに小町相合も寺を績てへきか

シテ我いにしへ百家仙洞のまじハりた
りし時さへごとによそへて言せども
よみしが今ハ花すゝき穂に出初て
霜のかゝる有様なく浮世に残る
ながらへよそては　ワキ実も道理なり
帝よりは憐の御詠をくだされし作
是までハへ　シテ何と帝よりは哀れ
哥の御事とて下されけるとハやあら
かたじけなや老眼とて文字もさだかならぬ
みへわかねどもあらあら見奉れへ
ワキはやはやあそばせへ　シテ御目もたうかな
あらおもしろの御歌へ　ワキ雲の上は　シテ雲の
ワキ御歌雲のうへハありし昔にかはらねど
みし玉だれのうちや床しき

シテ詞 あら面白の御うたやかなや古き
流れをくんで水上をたづねとあれ
と歌よみのいへしとも誰も誰も性とよや
ちかね時の渇きあり所詮返歌を歌を
唯一字にて申さう　ワキ詞 めづらしきの事
そや者のめでたき歌の三十一字を
つらねてだにも心の歌もあるに

一字にて歌とや申す事是も狂気の
ぬやらん　シテ いやそと云文字社を歌
あれ　ワキ ヌしと云もじとは如何に　シテ ちう
は帝の御歌を詠吟をはせ給へし
ワキ 不審ながらもはちあきて雲の上は
ありし昔にかはらねど見し玉だれの
うちやゆかしき　シテ詞 されはこそはさうらや

床しきをひさのきそてうちそ床しき
とよみし時ハ小町うちよみたるを云
あり　扨いかへもかゝるあしの首
や読　あふあふむかへしと云ハ
此哥乃様をとやあり帝の御哥を
ぢひまいらせて読時ハ天の恐れも
いかゞあらん和哥のみちあらハ非も

ゆるしたまふ世貴からして高
位よまじりとつらずざる和歌乃
徳とかや　夫哥の様をも尋ぬ
るに長哥短哥旋頭歌折句俳諧
混本哥あふむかへし一色文字あり
あの母をつく鸚鵡をしといふる唐土よ
さつれ鳥あり其名をあふむとしくて里

人の云ことをきてそれからそのう
鸚鵡といひ侍そし人を侍そしてよ
あうむの名るれとくよ歌乃を返も
かくれなきはあうむ返しとはや
ありうたや亭乃さ海諸りつき
いま人れ邦思ふるくれちよざきて
あしかりよのあつめ連ね亭人の其

多くある中に数多の小町は如ある花
れ色さこの言字のさ海ち人たちらかまそて
中よへくと續ところ家わ云納
みもえるし直に問へ和歌の六
義とて尋ねする小町か歌をとこう
だくおもと致れ有めよひくのえかよれ
あかうら義人のかくさらも世るりをくき

よそうの花とつらねし桃花雨ぞ
おひ柳髪風にみだるゝやらありし楽筝
をとうこきいほこり梨花ハ名のかん
吹しと今は嬋娟とおちぶれてましん
ていひきのつちなる小町のすがたなりける
めりよ小町業平玉津嶋にて法楽の
舞をまおひんへ　翔も業平玉津

嶋にまいりてしばしうへ我もまた
おしくまとんと都をはまくいはうとこめ
ていなり山蔦塚の霊も浦ちかく
和哥吹上よりゆり　玉津嶋よ
まいりつゞく業平の舞れ袖思ひ
めくりむきのもりとくさそのの狩衣
みだ紋のちり風のうちをかりがさ

おりゐしめぢがはらつゝ　和歌のひ
かりまつま　めくらん独やねざ
うつりわかの浦よ志ほみちくれば
がたを浪のあしべをさして田
鶴なきわたる鳴つる　声のうちにも
よしあやまちのひなたる名もよ
しなや志のひよの月みなめでし

これらて雲井もきえ人の
老をしなすれをと　かほとよもや
きえうつのかきのごとき人をまさぬ
おもひとたしらあやの　あら恋
しれもしやあかかくて　此日も筆
ゆくまよばらといひて　行家都
よ帰りまれハ　小町も後出こき

まてありと杖にすがりてよろ／＼く
と迷はつきゆく袖の涙だにおさへ
ゆく袖のなみだも関あへぬ柴の庵
にぞかへりけり

桜川

男ワキ「かやうに候者は東国方の人商人にて候
我久敷都に候ひしが此度は筑紫日
向に下りて候又此所の邊にておさな
き人を買とりて候彼人やさしく候へば此
文と身の代とを桜の馬場の西にすむ
桜子の母を尋て届けよと仰候

猶よ尋ぬ桜子乃母のかたへと急げば此
あたりにて候ひきに作ば先に安商人に
やさしや世を歎けばめでよ人商人や候ば桜子の
母乃御宿りにて候か

シテ女
詞「誰にてわたり候ぞ

男
「けふは桜子乃御方より候文此代
物を惜しむ商人を行へ給はん身を持
て参りて候がまひて惜しむ商人参る

女
「急ぎひらきて見れば文をそこゐまゐらする
てば侍もく此年月の御有様みる
もあまりの悲しさに人商人に身を
売りてあつまへ下り候あらいとし其子は今
はまさしき子なりしあなどや急ぎしや早
下
今は人をもゆき方さへしらぬゆくへいかに
見しをも出離の縁としては様をもかへ

絵にかきし花のことくもさらにまさりて
とりどりに名残おしきハ何ようり
うき身の母ハある賤ン　上哥　獨やもめの
はまの戸のうつく明し暮して憂き時
も子の代われハこそ慰むよすかなりけるそれハ
我影身ハ神もこれ花咲や姫の氏子
あるゆへと桜子となつけしも絵にかきし
たよられける故郷の今ハ何より
明暮をたのみ住へきみかあらハこそ我子
の行方尋ねて泣く泣くまよひ出てゆく
僧　はるかなる桜かりく山路乃まよい
ワキ詞　是ハ常陸國いそべ寺乃
住僧にて候又是に渡り候おさなき人
ハつくしの者にて候愚僧を頼む由仰候

程に師弟の契約をなし申して候又当
国に桜川とて花の名所の候
今を盛の由申し候程に幼き人を伴ひ
只今桜川へと急ぎ候

上歌 つくば山この
もかのもの花盛り雲の林の陰茂き
みどりの空もうつろふや松の葉色
も春めきて嵐も浮む花の波桜川に
も着きにけり

男詞 いかにや何とて遅く
来り給ふぞ

ワキ詞 さる者を伴ひ候て
御供申し候程にさてこそ遅なはりて候是
見事や花は今を盛りと見えて候

男 げにげに花は今を盛りにて候まづ是よ
面白き事の候女物狂の候ふがうつくしき
すくひ網を持ちて桜川に流るる花を

まうひんがきゝうしおもしろう狂ひ候
是に稚児座候ひて此物狂をとくさせられ候へ
かまへてとく狩られ候へ ワキ「心得候
御狂女を此方へめされ候へ 男「心得申候
やあいかに物狂よ いにしへのごとくおもしろう狂ひ候へ
持てこなたへ来れとや人の 女「めでたき
ある道行人の桜川には花の散り候か 行散

かほよきうらやましやなきさかれきたよ
行くやおとの花をもつて流れ行く花をや
掛けし花ちる水のまゝにとめ
まてしば山も木の間の月よまてとは
げにかくやおもしろの花をのやうくも雲の
色桜をも桜花散るに風のおこりには
地「水あるきの雲に浪の立つ 女「思ひを深き

花の雪 ちらぬ浪のかゝると見えよ
出たる物狂の故郷は筑紫日向の者
我も思ひ子ゆへしあひく乱るゝ心
つくしの海山越くて箱崎の浪立越て
末は須磨の浦又は駿河の海越て常陸と
聞や遠方を尋ぬるや親子の道なる
をば散るは桜子をいかにまよはん

げに流れたる桜川とくとくさこそ面白き
名所あれかと思へば子の名も桜子なれば
かざさしてひかればかゝとひかれもあつき
此桜川よ 散る花の雪とくみて
上哥
すぐる門から花衣の袖にかゝる残る雪
花鳥の立ならず親と子のやうに行
思もまさりてあはれさにむすびあはのならひ

よそ人も親と子のおもも
忘れもさらめやあらん契りてやましき
袖をこそうつらくみれども人ハ生へ数ら
ねと桜子の花ざかりと咲ぬく　ワキ詞「此わ
桜の下にて有きまはし立よりて尋ねや
と思ひもよらめ是成狂女だにも国
里ハ隔くれ人ぞ　女詞「是ハ遥乃筑紫乃
者にて候　ワキ「それハ行ゑもしらぬ狂乱
とハ成たるぞ　女「さん候出ちから子に別れ
かゝるの身となりまて離くい狂よ
思ひ乱れ候　ワキ「寔痛りやい又凡
やさしくうつくしき網もちたる流
るゝ花をすくひ給ふさへ渇仰の気色
みえ給ふに行とも立ちかくに候そ

女「げにや我が氏の神は木花さくや
姫と申すぞ神体は桜木にて入らせ給ふ
然れば我子も其御氏子なれば桜
子と名付そめし神の御名を咲
くや姫の名を桜子に添へて此川も
桜川の名もありつき花の数を
かずそへし思ひ子なり　ワキ「謂をや知らば

面白や君が行方を縁とすさきはかり
咲き川をしまより此東路の桜川迄
尋ね給ふもさんよふ　女「此川の名
はそれにも遠き花につきぬ名にはあり
殊に貫之が歌にいはく　ワキ「常よりも春べ
になれば桜花の都より　女「末見しも殊
ぬひくもれ国よ　ワキ「名も桜川　女「げにやと

上音
まして常よりも春べになれハさくら
川浪ハ花こそまなくよすらめと
読人ハ紀の貫之もよるこそ名
のミ残るよの桜川きしの白浪しげく
またハ霞も流れもせずうき鳴なるへ
く水の花きよ面白き河瀬なく
罕「げによ此物狂の面白ゆくるみと行ゆる
ばよ狂て行とて狂ひゆくめり 男「けんゆくる
ハもる様ゆ桜川よ花のちるとやらへ
狂ひ狂よくるハまことれめよかまひろ
みくゆ 罕「悲くは狂の世え 男「心なく意
咲ぬや俄よ山おろしの志て桜川の花
のちりゆよ 女「よしめさそと夕山風の
奥あねゐ花をさそふこそさめれ流まゐ

さかりに花もくもなし　あらしみまきハ山おろし
そのまゝ乃梢よ吹く落ちく　花のみか
さハ白妙の　浪とみまきハよりちる
桜か　ゆきかう　浪か　花かと　浮草
雲の河風に　ちまきつる浪も　桜川
く流るゝ花をまくらん　花れをとふ
すくらせともとまれ水の　雲をまきたる

花の袖　それ水流花おちく去とこ
しるくよ知里　月冷しく風去なつゝく
鶴なり　岸花紅に水を照し　洞樹
緑よ風と合せ　山花開く錦よ似たり
洞水たゝくあ井れよし　面白や恩
ゐひ愛ようかまきゝろく花もあつしき桜
川の一樹乃陰一河のあつれかきゝて知

名も所からあひにあひまは桜子が見し
ふる里の縁ぞかし
クセ
雪や舞ふらん
て花の鏡と成水は散かゝるをや曇る
と云し誠ちりぬまき波はあくたよ成
花と思ふ者も掬ひなば我も夢
なるを花のうきをみるもわざされば
梢より散ぬる花なれば落ても
水の気色ハ月白波の花よりも雲間別し
も今はさ花ならぬ梅のやちるひ百千
鳥花よあまわゆくあづまぢ三之ちかれ日花
雅よりやまわりて霞を気に露と
思ひめる心あり
上
ちるまでも名をのこ
やすくいろしと思ひわすれし桜河
浪のあやくひろ帯のせことぞ手よちる

花さそふよあらしと水をきぬ雪をも
たゝくらう浪の花は志らゞかまほく
もかづきりや見えとても洪花咲や
眺の御神木の花あれはもよまく
小さき水も陰と濁されど筏ひく
も心ぞと志らまなかして花よるへの水を
ゝとめさく桜川よあまよ
何とする桜

のづくどろへ散うらこそあらがひやまうし
風もつしちまきつそさる　さくらえも
うつる花ろくつ　かきさくの言詠めしへ
あらど青柳の糸桜　霞の間よへ　いかばさら
雲とみんへ　みよし野の　ことよし野れ
みよしのゞよど瀧津波乃花を救く若
ぞゝまと魚やかくらましよハ桜魚とやも

あつしや行きも白妙の花も桜も雪
も波もみなかよすぼうひいつめ拵され
ども花しハ木々の花誠ぞ我青めろ桜
子ろうちひしき我さくろ子そちひしき
めつよやいつま狂人のごとの誰ぞやかつさや
ありあらも業業の人の詫ん今る道ハ親花
いさや我らぬひの業業人りとの詞よハ行

乃ける為よ内詞よ　行ちら今ハつくもしくき
親子ハ契り朽もまぬ花桜子う序
詫んきよ　桜子をしくぞパ〆ハ再契りと見
もしまうひいつまき我子あるらん　三年ハ
目数ちしもうりて有りまもまさき親と子の
ものの姿ハかきれた　ますうろへ有れ
打しだくを　よくみまハ　はつつ子の

花の色は世の中に二八子ありきまゝ鶯の
おのが何も鳴きこそ蛙さへ涙なかれ
かくてともなひ立かへり母もさまも
たもとけ桜子の仏果の縁となりけりよ
まづ二世安楽のえん深き親子の
道ぞありがたき

東岸居士

是ハ遠国方の者にて候我此程ハ
都よりのぼりて候があまりさなきと一見仕て候
げに今日ハ清水寺へまいらばやと存候
松はとかくされ桜ハ末になりて花
よ嵐ある風なれ　是ハ見まほしく候
東岸居士にて渡り候か梅今日ハ如何事

説法聴聞は法の花ぞ　ロテ何　あら新敷
四つの聴聞とはいつも萬の皆目前
の境界なれば柳はみどり花は紅なる
上カヽル　面白の春の気色やな　甲何　見渡面白の
こゝろやな此橋なる為成人のかき
給ひたる橋ならで　ロテ　是はまた師自然
居士は法界無縁の功力をもつてかける
給ひし橋なれば　とにかく橋はよき橋なりける也
甲カヽル　抑東岸西岸の居士の郷里さへいつはり
成人の父母を離れて御出家するや
ロテ何　もつとも理を問給ふや　尤本来きたる
所もなければ出家といふべき謂もなし
出家にあらねば髪をもそらで衣も墨
に染もせで唯在家のつゝき道に入て

地セン「善とみても、とまの智を捨ても
シテ「愚かなる、折にふれ、時によりつゝ
シテ「白川に、かゝる橋を、みし、東の
上同「東岸西岸の柳の、ちかえはなく乱るさ
「南枝北枝の梅の、範開法の一まちに
地「わたらん鳥の橋あれば、なそめよ入つは
岸はいつりゆへや
地「又いつものごとく

シテ「誠よく御勢ろく、実は見えも
狂言綺語をもつて讃仏転法輪の業
此道にも入ぬれば、人の心の花の、きよく
地「ぱいちやうこん見えても
上歌「法の舟
みなれ棹、御法の舩に都まき棹され
彼岸に至る舟を
シテ上「面白や花も胡蝶の
夢のうち
地「遊びたはふれまひまふとかや

鈔によまうちくあらゆる有の仏法の
趣き道ゝ縁生の道すくよ今う差て
きぬ読とうや　仏像をてよくれて
法によまて受うりうるゆへよまうる秋
来れたびをき難きい出離の道　死を
惜き月をみらくも起て安きい妄念也
罪障の山よいたとおく煩悩の雲

につうして仏前の光晴く　生死の
海よいとうしおくよず有の波荒うして
ぽ悲の月宿し　生とうらるよ仏を
て菩よくうしきを受かきねば死よ海るよ
随つらく随喜よるも写おぼよ読く六道の
ちまういよい来うぬ所もおく生死の扉
よい宿ぬ栖もおく生死の翔衰をとい

峯もやいまんぞうつとやまんこまう
おとづいちもとまれハ雲とのぼり煙と
消ゆく其跡をとゞむるもなし
おしといちんともれも又恩愛の中心
とまつて腸をたち涙をうかさるゝと
云るすあり彼芝蘭の契り入旅よそ
かだねとへ愁歎の焔よこかきたる紅蓮大

紅蓮の氷をとき終とその事あし鴛鴦
のつがひのまつみすよ眼をとへ慈悲の涙よ
うるほさる焦熱大焦熱の焔をへ終よ
きあひなのあしかふるつなきいそぎを持て
信テ殺生偸盗邪婬ハ身よりして作る罪也
妄語綺語悪口両舌ハくちをもってつくる罪
あり貪欲嗔恚愚癡ハ又心よりひく絶

きくは法の声あれ棹みな嵐によるの

らまを　ワキ　げにやすよ鶏鼓をうつてちらん

きく　シテ　面白や松吹風さへくやして

浪の声もたうくたるを　ワキ　所はあまたふ

洛陽の誠もさき白河の　シテ　浪の鼓や

風の流　ワキ　うつきゆくや橋の上

男女往来　ワキ　貴賤上下乃　シテ　袖を

つらねてゆききあふさいく流を浮波の

げにやつかちうつまろく百とり

シテ　百千鳥囀る春はものごとに　地　あらたま

れども我ぞふりゆく

地　行は白河の橋を隔てて結びハ　シテ　行ハ白川

地　こなたハ　シテ　西岸　地　東岸

地　さゝ波寄　同　シテ　汀羅

地　引浪ハ　つかん　いさまもく極

楽の歌舞乃菩薩の御法とハげにや
きりや揺人よくあら面白屋
あら南無三寶　上　京戦もかつこゝも
笛ひちりき絃管とも極楽のせば
さゝの梢遊ひとやあと　行とたく
とかく雪や氷と隔つる萬法ミな
如成京相れかとよいつ悩よく

右之本者観世太夫織部
章句眞本令版行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再校
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛